



矢作りの様子。明覚郷の一同が集まり、総出で矢の作成を行う。その数は850本にも及ぶ。

はぎひよしじんじあのやぶさめ
西平・萩日吉神社の
流鏑馬



明覚郷当番家

馬場博幸さん (56歳)

「いろいろなものが変化していくこの時代。受け継がれてきたこの伝統を、今なりのやり方で、時代にあわせて残していきたい」



矢取り子

馬場涼輔さん (11歳)

「これは、馬場家に生まれた者としての役目です。一生に一度のことなので、最高の流鏑馬にできるよう頑張ります」



クネユイ



西平でのクネユイの様子。この時の独特の結び方は「イボユイ」と呼ばれる。

ヨイマチ



流鏑馬前日のヨイマチ。神前には山海の食品が捧げられる。昔は当日と同様に矢を射ることなどもしていた。



この日のための晴れ着です

準備



篠切りの様子。伐採した篠を2尺8寸の長さで切りそろえる。



篠磨き。切りそろえられた篠を、矢として使えるよう加工を行う。

西 平・萩日吉神社の神事。形民俗文化財に指定されている流鏑馬。現在3年に1度行われているこの神事は、天福元年(1233)11月26日に始まったといわれ、明覚郷と大河郷(小川町)が奉納す

る。討たれた木曾義仲の家来である七氏は、落ちのびてきた際に、平の坂本家の先祖に宿を借り世話を受けた。七氏は坂本家の忠告により、明覚郷(馬場氏・市川氏・萩窪氏)と大河郷(横川氏・小林氏・加藤氏・伊藤氏)に分かれ住

みつくことになった。そして、七氏は、主君の義仲を祭った萩日吉神社に、流鏑馬を奉納すること、その時のクネユイは坂本家でやること、となったといわれている。

準備 (12月14日)

明覚郷では、当番家を中心に、矢の材料である篠を切り出し(篠切り)、一定の長さに切り、磨く(篠磨き)。その後、羽を取り付けるなど一本一本加工し、矢を形にする(矢作り)。

クネユイ (1月12日)

西平地内の会場の特設馬場では、萩日吉神社と坂本家を中心とした西平の人が馬場つくりを行う。これは「クネユイ」と呼ばれる。

宵まち (1月18日)

流鏑馬の前日。馬に乗る乗子と矢取り子が着装し、神官による祝詞の奏上、矢と参加者のお祓いを行い、式典を行う。そして当日を迎える。